スタンドと非日常は繋がり合う

蟲之字

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あなたはジョジョが好きですか

ＹＥＳ！ＹＥＳ！⇒次へ進む

ＮＯ！ＮＯ！⇒ブラウザバック推奨

あなたは二次創作が好きですか

ＹＥＳ！ＹＥＳ！⇒次へ進む

ＮＯ！ＮＯ！⇒ブラウザバック推奨

あなたは原作のスタンド使いはいないけどスタンドだけが出張して出てくるほぼオリジナル作品でも読んでくれますか

ＹＥＳ！ＹＥＳ！⇒次へ進む

ＮＯ！ＮＯ！⇒ブラウザバック推奨

もしかしてこういうの読むのにまったく抵抗ない人ですかぁ～!!

ＹＥＳ！ＹＥＳ！ＹＥＳ!!⇒作品を読む

目次

第一話「目覚め」――――1
第二話「エンカウント」――――6
第三話「エンカウント・ザ・『戦車』」――――11
第四話「エンカウント・ザ・『星』」――――16
第五話「勇敢なる愚者」――――21
第六話「Ｋｎｏｃｋ　Ｔｈｅ　Ｌｏｃｋ」――――26
第７話「Ｋｎｏｃｋ　ＴＨＥ　Ｌｏｃｋ　その二」――――29
第８話「Ｋｎｏｃｋ　ＴＨＥ　Ｌｏｃｋ　その三」――――32

第一話「目覚め」

俺はただ願った。たった一つのちっぽけなことを。俺をぶん殴ってあのクソ野郎の顔面をたった一発でいい、殴り返したいと。殴られすぎてボロボロの体でゴミ溜めから立ち上がるとなぜかすでに去ったはずのやつの顔がなぜか目の前にあった。ただ、それだけでいい。目の前にあのクソ野郎がいる。その事実があればそれだけで十分だ。俺はただ全力でやつに一発ぶちかました。だが、そこからの記憶は鈍い痛みで消えた。

「・・・夢…か…？」

広村形峰（ひろむらかたみね）はベッドから落ちて目が覚めた。彼はベッドから落ちた状態でさっきの夢について思い返す。

「あれは昨日の出来事のよーな、マジもんの夢のよーな…どっちだったかな…」

夢の中だと思われるあのケンカでは自分はボロボロだったが体は右手以外は痛くなかった。だが、逆に言うと殴った右手だけは痛く余計混乱させた。

「まーあー、さっきのが夢ならー、時計の針がすでに１１時を指しているのはおかしいよなー。おもくそ寝坊じゃねぇか。えーと、どれどれ～、今俺の部屋の壁の時計は～えー、と、１１時１０分か～…て、なにー！１１時１０分だとぉ?!遅刻じゃねえかぁ!!」

広村形峰、年齢１６歳、高校一年生。身長は１８５ｃｍ、体重７９ｋｇ。

不良のような口調や井出立ちで喧嘩っ早いが性格は少しおとぼけてて友達思いのやさしい男。だが、物事を考えるのが苦手なおバカである。

家族は両親と兄がいるが今は父親との二人で暮らしている。

「やべーやべー！流石に二限からでもでねーと先公に何言われることやら!!」

形峰はどたどたと制服に着替えながら髪をセットして台所に向か

う。台所には誰もいないがテーブルの上には書置きとラップのされた朝食（ベーコンエッグとトースト）があった。
『すまん、今日からしばらく出張だったわ☆帰るのは一ヶ月後とかになるからよろｗ（＾▽＾）ノシ』
「…またかよあのクソジジィ!!前回も前々回も出張の時は前もって言っとけって言ったろがボケェ!!」
父親の現代っ子風の書置きをビリビリに破りすぐに朝食を食べて学校に向かった。

『三栗音（みくりね）高校』
偏差値は特別高いわけでもなく低いわけでもない普通の公立高校。服装の自由度は他校と違い緩いため人気な高校ではある。広村家からは徒歩１５分のところにある。
形峰は全力で学校に向かった。彼の足ならこのままなら普通の道なら１０分で学校に着く。
「なら、路地裏通れば５分で着くだろ!!」
だが、形峰が入った路地裏には三人のいかにもなヤンキー屯っていた。
「おいおいにぃちゃん！ワシらの島になにしとんじゃぁ!!」（黄色モヒカン、グラサン）
「おん！われぇ！あん！われぇ!!」（緑刈り上げ、マスク）
「とりあえず金置いてけやガキィ!!」（真っ黒ＨＡＧＥ☆）
形峰は遅刻した時の先公のことばかり考えていて目の前のヤンキー達にあまり興味を持ってないようで、
「あー、すいやせんね、ちょっと学校遅刻してるんで通っていいっすか？」
と何事もないようにそそくさと横切って行った。
「あぁ、学校かならしゃーねーな。ほら行った行った」
「しっかり学んで遊べよ若人！」
「青春できるのは今しかねーから大切にしろよ！」
と納得して明るい声援をかけるヤンキーたち。まるで自分たちが

経験できなかったことをしっかり体験して感じてもらいたいからなのか…

「「てなるか!!待てやボケェ!!!」」

ですよねー

「そのまま行かせてくれよ!!」

形峰の叫びはむなしくヤンキー三人に囲まれる。

「それで『はいそうですか～』で済むと思ってんのか？いくらなんでも甘すぎやしねぇかオラァ！」

「えー…あんたら小学校で『道徳』ならわなかった？他の人には優しくしましょうって」

「んなもん知るかぁ！てめぇこそその不良みてーな格好で説得力あると思ってんのかあぁん?!」

「え…ないかな～？」

「「あるわけねぇだろ!!」」

黄色モヒカンと緑刈り上げは形峰のほぼ目の前でメンチを切っているがその間に黒ハゲが釘バットを取り出している。

「まぁいい。こいつには口より『こいつ』だろ」

「へへ、楽しくなりそうだぜ」

ヤンキーたちは釘バットを持ち路地裏から逃げられないように前後で形峰囲う。

「おう。てめぇらいいのか。ケンカっをやるってことは『やられる覚悟』ができてるからってことだよなぁ？」

その場に鞄を置き軽く拳を握った。さっきまでの形峰はまったく威圧感を感じなかったがいきなりそれが強くなった。

「あ…なにいってんだこいつ」「かまわん、やれー！」

形峰の言葉に耳を傾けずヤンキーたちは襲い掛かる。

「なるほど。つまりは『死なない程度なら何やられても文句はない』ってことでいいんだな!!」

まずは緑刈り上げが釘バットを振りかぶったが無防備になっている下半身、男のシンボルを蹴り上げる。

「オ”オ”ン…?!マンマァ!!」

「これすらまだ生ぬるいぜ！かかってこいよダボがぁ!!」
残ってる黄色モヒカンと黒はげは一瞬怯んだが黄色モヒカンが雄たけびと共に釘バットを構えて突っ込む。
ガオン
だが、形峰まであと数歩というところでなぜか釘バットは黄色モヒカンの手から離れ形峰の手に収まった。
「へ？あれ?!」と自分の手を不思議そうに見つめてる間に形峰は釘バットで腹部をスイング。
「ホギャプリィィ!!!」
残ったヤンキーは黒ハゲ一人、だがそいつは釘バットを捨ててすでに逃げていた。
「オラァテメェたちから吹っかけてきてなに逃げてんだぁ!!」
このままだと路地裏から出られてしまう。しかもその近くは人通りの多い道になっているからそこでケンカは流石にやばいと思った。なんとかここでやつをぶん殴ってやる。そう考えていた。
ガオン
だが、またしても不可思議なことが起こった。路地裏をあと一歩で出れるはずだった黒ハゲがいきなり形峰の目の前に現れたのだから。それはまるで形峰と黒ハゲの間にある空間を削り取ったように。形峰はそれを不思議とも感じず、ただチャンスとしか考えていなかった。そのまま黒ハゲの腕をつかみ柔道の技など微塵も感じさせない雑な力技で地面に叩きつける。
「ふぃー。これで全員か。さて、昼休み前にはなんとかつきそうだな。でー、鞄どこやったっけ？」
路地裏をぐるっと見で鞄は形峰が入ったところの近くに置いてあった。「お、あったあった」と発見した。
ガオン
そしたらなんと鞄の方から形峰の手元に飛んできた。
「お、サンキュー『ザ・ハンド』」
形峰は後ろにいる人の形をした…
「て誰だテメェ!!てかなんなんだこれ！悪霊テメェはアァン！」

ノリツッコミ…、いやノリ逆ギレだ…どうやら本人も気が付かないうち、一種の本能でこの悪霊の力を使っていたようだ。ではこの悪霊はいったいなんなのか。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔ…

「いや！てかそれより学校行かなきゃ!!」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

第二話「エンカウント」

形峰は不良を吹っ飛ばしすぐに学校に向かった。結果としては結局２０分経ってしまった。

「クッソォ!あいつらいなかったらもう少し早かったのによぉ!!」

校門の周りのフェンスを無理やりよじ上り校庭に侵入する。

「こらぁそこの遅刻しているのに無言で校内に入ろうとしている生徒待ちやがれぇ!!」

「ゲェッ・・・ヤッバ・・・」

形峰を待ち構えていたのは形峰よりも巨漢、三栗音高校の生徒指導の金下剛三郎（かねしたごうざぶろう）である。教師としては全教科担当でき、運動神経は言うまでもない。生徒の面倒見もとてもよく生徒から信頼されている。だが、その見た目と生活指導の厳しさから別名『金剛』と呼ばれ、出来の悪い生徒からは畏怖されている。

「そこの何年何組がわからん生徒待てぇい!!トッ捕まえた後一日中説教して更に3日分のきびし～課題をくれてやる!そこになおれぇ!!」

「ウゲー!金剛いるじゃないですかイヤー!!」

逃走すること5分。形峰はなんとか金剛をまいて教室に着いた。が、すでに二限は終わっていて休み時間になっていた。

「ががーん…二限間に合わなかったか…ぜってー先公になんか言われるぜトホホ…」

肩を落とし自分の席に座る。

「重役出勤ご労様、形峰殿」

形峰の前の席の住人はにやけながら挨拶してきた。

「あぁ…おはよう舞雄」

その人物は橋野舞雄（はしのまお）。身長１５３ｃｍ体重３８ｋｇ

少しぶかぶかな制服を着ていてふわふわのクリーム色のショートヘアーに深海のように澄んだ青い瞳。小動物のような見た目で女子小学生と言われてもおかしくないが男子高校生である。性格はおしとやかで落ち着いているがわりと子供のような活発さや無邪気さもあり影ながらファンは多い。形峰とは幼馴染というか腐れ縁という

ことで常に一緒にいる。実家はパン屋である。
「珍しいね遅刻なんて。また喧嘩でもしてたの？」
「あー…ま、そんなとこかな」
（昨日の夢と今朝のあの悪霊については言わない方がいっかな）
「そっか。一応前の授業のプリント貰っておいたよ。後先生には病院行ってからくるから遅れるって言っといたよ」
「ありがてぇ！さすが舞雄だぜ！」
その後、他愛のない会話をしていたらすぐに三限が始まった。

（それにしても、今朝の悪霊、『ザ・ハンド』ていったか？てかなんでその名前を知ってるんだ？んで、そいつは何でも『引き寄せる能力』を持っている…てことでいいんだよな？）
授業には聞く耳持たず自身の悪霊について考えていた。今朝の不良をボコした時、ガオンという効果音と共に引き寄せた時を思い返す。イメージとしては対象のものを自分の目の前、あるいは手元に寄せる。だが、その時はザ・ハンドの姿は見ていなかったから実際どのように引き寄せてるかはわからなかった。
（ん～…ま、帰ったら色々試してみっ「グハァ！」
形峰は自分がさされたことにに気が付かず、教師の鋭いチョークを喰らう。
「広村！次聞いてなかったらゼロ距離で投げっからな！」
「へーい…」

そして、その後の授業は何事もなく進み放課後になった。
「よっしゃ！授業終わり！舞雄～帰ろうぜ～」
「まったく、形峰は相変わらずだね。校門に金剛いるかもしれないよ？」
「だからばれる前にさっさと帰るんだよ」
「そういうところだけは頭いいよね～」
そして、校門には生徒は数人いるが金剛の姿はなかった。
「よし、さっさと行くか！」

「あ、ちょっと待ってよ」
二人はすぐに校門は速足で駆け抜け学校を出た。

「ところでよ、帰りマクドでなんか食べてかね？やっぱ購買の飯じゃたんね～よ」
「うん、いいよ。あ、ボクは新発売のピーチ味のシェイクでも飲もうかな～」
会話をしてマクドまであと少し。だが、いきなり舞雄が路地裏に引き込まれていった。
「あれ、舞雄？」
不思議に思い形峰も路地裏に入る。

そして路地裏では・・・

「へへ、まさかあいつにこんなきゃわい～お友達がいたなんて運がいいですねアニキ」
舞雄を締め上げてる金髪の青年と朝の不良（緑刈り上げ）がいた。
「…そうだな。これで『ヤツ』も俺と闘わざるをえないな」
（闘う？こいつなにを…しかも相手は形峰?!）
舞雄は体を揺らしなんとか逃げようとするが青年の腕から離れられなかった。
「すまないがおとなしくしてくれないか。君に危害を加えるつもりはない、だがヤツがくるまで少し耐えてくれ。なるべく苦しまないようにしてやるから」
小声だったが拘束している青年は舞雄にそう言った。
（確かにあんまり力は入れてない…けどボクの力だと抜け出せないんだよな…てかそもそもの理由がわからない）
「あいつを始末しているあいだに俺はこの子を楽しませてもらいましょうかね～ヒッヒッヒ」
緑刈り上げはゴマをすりながら下品に唇をなめる。
「チッ…うせろ、下衆め」

「ハイ?·今。なんと?·」
「俺は貴様らをやったヤツと闘うために利用されてやってるんだ。それ以外のことをするのであればうせろ、と言っているんだ」
「(うわ、なんだこいつ…ナイト様きどりかよ。こっちが下手にでてるからいい気にでもなってんのか)え〜、い
いじゃないですかべ・つ・にッ…!」
緑刈り上げは謎の金髪青年にニコニコして近づきあと一歩というところで殴りかかる。
だが、その拳は空を舞った。空振りとか避けられたとかではなく、拳『だけ』が空を舞っているのだ。緑刈り上げは拳が当たらず勢いよく体勢を崩し転ぶ。そして、その拳が自身の頭に直撃し、不思議そうに拾おうとするがそこで初めて自分の右手が切断せれたことに気が付く。
「え…え?!嘘俺の俺の右手がぁぁー!!」
そしてすぐさま右手を拾い、右腕を上げながら病院へ走っていた。
「な…なんだ今のは?!緑の変人が殴りかかろうとしたら拳が当たる前に手が切り落とされていた!刃物なんか一切見えなかった…!いや、ボクをこうやって両手で拘束しているからまず刃物を持つことすらできないのに…!!」
流石に目の前の不可解な現状を目の当たりにして舞雄は叫んでしまった。青年は焦る様子はなかった。いや、むしろ笑っていた。なぜなら、舞雄の声で形峰が登場したからだ。
「オイ…俺のダチ、離せよ…!」
目の前の血も、さっきの別の男の叫びもどうでもいい。こいつが舞雄をさらった。形峰はその怒りだけが満ちている。
「待っていたぞ!俺と同じ力を持つ『同士』よ!さぁ!思う存分、闘おうじゃないか!!」
逆に金髪の青年は満面の笑みで闘争本能むき出しであり、一種の狂気さえ感じる。
今、二つの力が激突する

To be continued?

第三話「エンカウント・ザ・『戦車』」

「同士とか戦うとか関係ねぇ…俺はよぉ…ダチを離せって言ってんだよ…！」

形峰は速足で徐々に加速しながら青年に近づくいていく

「安心しろ、この子は離す。俺はただお前と戦うだけだからな！」

金髪の青年は舞雄を丁寧に膝を地面につけて降ろしている、だが、加速した形峰はすでに青年を殴る姿勢に入っていた。

「やれやれまったく、うれしい行動をとってくれるな広村形峰。『銀（シルバー）の戦車（チャリオッツ）』!!

殴りかかる形峰に対し、青年の後ろから銀の甲冑を纏い片腕にレイピアを携えた騎士が現れ形峰の拳を受け止める

「なに?!おまえも悪霊を…！」

「悪霊。ふふ、なるほど、お前は自分の力をそう呼んでいるのか。だが、俺はこのチャリオッツを悪霊なんて呼ばない。こいつは俺の『剣』！誰にも負けない強い信念の具現化だ!!」

青年は舞雄を下ろし立ち上げる。そして舞雄はすぐに形峰のそばによる。

「おっと。そういえば自己紹介が遅れたな。我が名はアンドレー。我がチャリオッツと戦えるものを探していたのだよ」

「ほー。そりゃわざわざ自己紹介ありがとよ。それで？舞雄を攫った理由は何だ？」

形峰は舞雄が戻ってきて落ち着いたかと思ったが拳を鳴らし額の血管を浮かべながらギリギリ理性を保っている状態だ。

「俺はただチャリオッツが見える同士と正々堂々と戦いたいだけだ。まぁ、そのための手段というものは選ばんがな」

「ほ、ほぉぉぉ～…」

態度や理由にムカついて少しずつじりじりと寄っているがまだギリギリ耐える

「では逆に聞くが、君はいきなり知らない人に『俺と戦ってくれ』といわれて戦うか『ドゴォ!!』

「俺は全然『ＹＥＳ』だダボガァ!!」
アンドレーが話している途中で限界がきて殴りかかりそこら辺に転がっているゴミ袋の山に吹っ飛ぶ。
「ちょうどいい!テメェで俺の悪霊の実験してやる!!」
一歩踏み出そうとしたが足を止めた。
「ねぇねぇ形峰…悪霊とか力とかってなんなのさ?!」
舞雄は不安そうな顔で形峰の服の裾を引っ張ていた。
「あぁ…そいつについては悪いがアイツをぶっ飛ばしてからだ。舞雄は離れててくれ」
それと同時にゴミ袋が吹っ飛びアンドレーが立ち上がる。
「フハハハ!いいぞ広村形峰!!その友を思いやる優しさから湧き上がる怒り!闘争心!!話してる途中で殴られたのは少し悲しかったがぁ実に気に入った!さぁ仕切り直しだ!俺に全てぶつけてこい!!おまえの悪霊を出してみろぉ!!」
高笑いしながらアンドレーは立ち上がった。頭にバナナの皮を乗せていることなど気にしていない、いや、気が付いていないだけか。
「な、なんだあのアンドレーという男!形峰とは真逆で手段は問わないで物事を冷静にとらえる男かと思ったけどその実は同じ!いや、それ以上か?!心の中にある闘争心の炎は形峰以上だ!!」
「それがどーした!俺は舞雄を利用したことを後悔させるためにぶちのめすだけよ!!出てこい、ザ・ハンド!!」
この狭い路地裏で初めて悪霊(ザ・ハンド)と剣(チャリオッツ)が対面する
「なるほど~それがお前の悪霊、ザ・ハンド。俺以外の力を見るのは初めてだ。右手に異様な力を感じるが、昆虫の複眼のような眼が愛らしいではないか」
「あぁ?!ふざけてんのかテメェ!!んなもん関係ねぇだろがぁ!!(ガオン)」
「なに?!右手を振り下ろすことによって謎の吸引力が…!!これがやつの『引き寄せる能力』か!」
アンドレーは引き寄せられ目の前に来た、
「だが、攻撃はあくまで生身の人間のお前の拳なら対処は簡単だな」

チャリオッツはすでに上半身をガードする姿勢になっていた。
「誰が生身で殴るだけだと言った！」
拳は握っていたがすぐさまザ・ハンドの右足で蹴りを放ちアンドレーは体勢を崩す。バナナの皮も落ちる。
「なに?!卑怯な！」
「卑怯だぁ?!ケンカに卑怯もクソもあるかぁ！」
次こそ生身ではなくザ・ハンドの拳をアンドレーの顔面に放とうとする
「そうか。確かにそうだな。ここでの戦いにおいてルールはない。つまりは卑怯もなにもない、ということか。チャリオッツ!!」
ザ・ハンドの拳に対しチャリオッツのレイピアが迎えうつ
「うげぇ！み…右手が…！」
だがレイピアは手を貫通することはなく形峰をはじくように飛ばし壁に打ち付ける。
「悪霊のダメージはこっちにもくるのか…！それにしてもなんだあのレイピア！先端がビリヤードのキューのように平らになってやがる！舐めてんのかこんちくしょー!!」
「舐めてる？違う！これは最低限の君への礼儀さ！君は刃を持たず拳で相手している！ここでチャリオッツの刃で貫くのはルール上可でも俺の戦いの流儀が許さないんだ！」
「その志は立派だがよぉ！そんなものをここに持ち込んで俺に勝てんのかよぉ!!」（ガオン）
壁に打ち付けられながらもすぐさまザ・ハンドで引き寄せる。だが、目の前に来たのは
「なに?!引き寄せるものが違ぁう!!」
アンドレーではなく近くにあった金属製のゴミ箱だった。しかも生ごみたっぷりで重量はなかなかのものだった。形峰は飛んできたゴミ箱の重量で再び壁に打ち付けられる。
「なんだ？不安定な姿勢だからターゲットでも間違えたか。だが！さっきのお返しとしてこのまま撃ち込ませてもらう!!」
ゴミ箱ごとチャリオッツでラッシュをかける。ゴミ箱を蜂の巣に

しながら形峰を打ち抜く。
「ここまでか。やはり同士とは言えそこら辺のチンピラに毛が生えた程度という感じか。少し残念だ」
アンドレーは髪をかき上げその場から立ち去る。それとすれ違うように舞雄が形峰に近づく
「うわぁぁぁ！形峰ぇ!!」
「…安心しろ。再起不能にはなっているがアイツは生きている。数日入院すかもしれないがな」
すれ違ったときアンドレーはそう舞雄に対して呟いた。
「…なんで、あなたは戦うんですか…他人を傷つけるんですか…？」
舞雄もすれ違う時うつむき、涙声で泣くのを我慢しながら質問をした。
「そうだな…俺の勝手な理由だが、俺と同じ力を持っている人と出会ってチャリオッツの存在を肯定したかった。というところか」
そしてアンドレーは路地裏を…
「最後に一つ…いいですか」
出る前に舞雄の言葉で振り向く
「…なんだね？」
「病院送りになるのはテメェだダボォ!!」
『病院送りになるのはテメェだダボォ!!』
舞雄のうつむいていた顔はニヤリと笑い、壁の近くにある蜂の巣になったゴミ箱がアンドレーに飛んでいく。
「なに?!バカな!!」
衝突音と共に吹き飛び今度こそ路地裏を出て大通りに出る…
「更に『空間を削り取る』!!」（ガオン）
大通り一歩手前でゴミ箱ごとまた引き寄せられる。
「そしたらあ～ら不思議。目の前にはクソったれとゴミ箱が引き寄せられる！」
そのままゴミ箱に叩き込むように殴りぬける。
「誰がぁ～再起不能だってぇボケがぁ!!」
「形峰、多分これは気絶してるよ」

形峰は服のほこりをはたき舞雄は鞄を取りに行く。
「それにしてもナイス時間稼ぎだったぜ舞雄！」
「そっちこそナイスダンクだったよ形峰！」
二人は互いを褒め合いハイタッチする。
「それにしても、なんか最後らへんで『引き寄せる』じゃなくて『空間を削り取る』て言ってたけどなんで？」
「あぁ、あれ？…まぁ…本能的にかな～。ま、悪霊についてとかはマクドをテイクアウトして俺の家に行ってそこで話すぜ。シャワーも浴びて―し」
そして二人は路地裏を抜けマクドへ…

「そこの少年たち、すまんが待ってもらえないか」
向かおうとしたところ反対側から女性の声が聞こえ振り向き立ち止まる立ち止まる。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔ…

「また新手かよ！もう俺今日だけで色々起こりすぎてそろそろ頭イテーんだけど?!帰らしてー!!」
なお、その願いは誰にも、作者本人にも聞き入れられなかったのであった
「チクショー!!」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

第四話「エンカウント・ザ・『星』」

路地裏に現れた謎の女性。それに対し形峰はふたたびこぶしを握り戦闘態勢に入る。
「テメェもアンドレーの仲間かオラァ!!」
形峰はその女性にザ・ハンドを出しながら接近する。
「やれやれ、血の気が多い野郎だな…『星の白銀(スタープラチナ)』」
謎の女性の背後からも悪霊が見え形峰はやっと止まる。
「私は君と話に来ただけだぜ。そいつを引っ込めてくれねーか?」
女性もスタープラチナをすぐに引っ込めた。そしてそれを見て形峰も頭をぽりぽりかきながらザ・ハンドを引っ込める。
「あ~…その話って長いんすか?俺もう帰りたいんすよね」
「そうだな、正直言うと長い話になってしまう。なぜなら、私は君たちの力について研究しているからな」
「なに?!あんたらも同じ力を?!!」
「ああ。ま、立ち話でするような内容じゃないから私たちの事務所まで来てもらっていいか?ここから5分ほどで着く。なに、できる限り手短に済ませるさ」
「…まぁ、少しだけなら聞いて行くか。」
「そしたらボクもついて行っていいですか?形峰の言ってる悪霊とか力はないけど…なんとなく知っておかないといけないと思うんだ」
「そうだな。ただの友人というだけならあまり聞かれたくはないんだが…いかんせん、今、この街で起こっている異変に関係あるかもしれないからな。わかった、君も付いてきてくれ」
唐突に身近な危機を知らされ二人は戸惑いを隠せない表情になる。
「ま…待ってください!!この街に起きてる異変って…!!」
「落ち着いてくれ。それについても事務所で話すさ。それと、形峰君、でいいのか。そこのゴミ箱にいるやつを持ってきてくれないか?そいつにも話がある」
形峰も何か言いたそうだったが女性にすぐに口を出され口ごもる。

「…わかったっす」

それから形峰がアンドレーを背負って女性についていき、５分後。少し古めの２階建てのビルに着く。

「ここだ。入ってくれ」

ドアの近くの機械にカードをかざしドアのロックが解除される。ビルのなかは外観と違い近未来の研究所のような内観をしていた。

「ほへーすっげぇ～」

「ねー。外と中でまったく違うね」

「さぁ、入ってくれ」

奥の部屋はマンションのようなキッチンが一緒になっているリビングのようなオフィスだった。そしてそこにはもう一人女性がいた。

「あ～一茶さんおかえりなさ～い。やや、そこの男の子達は？」

「あぁ、恐らく今回の被害者っといったところだ。ルピナは金髪の彼の手当てを頼む」

「はいは～い」

ルピナと呼ばれた女性は形峰にアンドレーをソファーに寝かすように頼んで救急箱で傷の手当てをし始める。

「それじゃ、改めて自己紹介しよう。私は『天能坂一茶（てんのうざかいっさ）』。そしてあっちは『星坂ルピナ』。私たちは君が悪霊とか力と言っているものを調べているＳＰＷ財団の研究者だ」

「ＳＰＷ財団。名前は聞いたことあります。けど正直何をしてるかは…」

「ＳＰＷ財団ね～？はて、どっかできいたような？まぁいっか」

そして形峰と舞雄も軽い自己紹介をすます。

「それでは！早速ですけど本題に入りますね～。君たちが悪霊と言っている存在は近くに現れ微笑んでくれることから『フレンズ』！！私たちはそう呼んでいるのよ！！」（ゲンコツ）

ルピナが目を輝かせながら熱弁したが一茶のゲンコツを喰らう。

「やれやれ、お前はなんでそこで毎回暴走する。あぁ、ルピナのは気

にしないでくれ。」
二人は「あ、はい」と愛想笑いするしかできなかった。
「改めて説明しよう。我々が研究している力とは生命エネルギーのヴィジョンの具現化。そして名を『スタンド』。我々はそう名付けている。ちなみに、スタンドはスタンド使いにしか見ることができない。それは舞雄君が形峰君のザ・ハンドを見ることができないので証明できる」
「な…なるほど。でも一茶さんはそのスタンドっていうのがこの街の異変に関係していると言ってましたが…」
「それについてなんだが、まずスタンド使いっていうのは例外を除いてほとんどが生まれ持った素質なのだが、今この街ではその例外が頻繁に起こっている」
その例外というのに形峰はやっと自分のスタンドについてピンっときた。
「て～ことは…俺もその異変に巻き込まれてるってことっすかぁ?!」
「その通りだ。今この街にはスタンドを引き出す特殊な『弓と矢』があって私たちはそれを探している。」
「しかも悲しいことに、その弓と矢の持ち主はわかない上に謎の昏睡状態の患者の増加。これも恐らくは弓と矢の被害者。としかわかってないんですよね～…」
その昏睡状態の患者の増加と聞いて二人は
「そ…!そんな!!新聞やニュースでそんな情報なかったですよ!!」
「あぁ!!それが誰かがやったもんなら警察とか動くんじゃねぇのかよ!!」
二人同時に大声を出すが一茶はやれやれという感じで
「それについては少し考えてみろ。普通に弓矢で射抜かれたら穴が開くだろ?だが、形峰やその昏睡状態の患者には穴一つ空いていない。つまりは、弓と矢の持ち主はスタンド使い。そしてスタンドはスタンド使いにしか見えない。つまり、警察が動いた所でなんの証拠も出てこなくてお手上げなのさ」

それを聞いて二人は何も言えずうつむく。実際考えればすぐにわかったが自分たちの知らない所でとんでもないことが起こっていることに怒りを隠せなかった。
「そこで！私たちＳＰＷ財団の登場ってわけですよ～！私たちが法的に裁けない輩をポリスメンの代わりに裁いていこう！ということですよ～」
「ということだ。そこで、形峰君には協力をしてもらえないかってお願いがしたかったんだ」
それを聞いて形峰は怒りを通り越して満面の悪そうな笑みを浮かべ、
「ほぉ～。そりゃあ面白そうだなぁ。俺、そういういけすかねーやつをぶん殴るのは大好きなんだよね」
荒い鼻息に手からは地獄の底のような音を鳴らす。
「ということで、今日は手短にということでここまでだ。できれば明日もここに来てくれるか」
「それと連絡先も交換しましょう♪」
そして二人は連絡先を交換した後にビルを出た。

「ねぇ形峰…あの二人の話信じるの？」
「あぁ…あの二人は悪霊いや、スタンドか、それについて知っているし俺も実際目の当たりにしたから信じざるを得ないってところか。とりあえず、俺は明日もいくよ」
舞雄は不安そうな表情で形峰もそれはわかっていた。
「なぁ舞雄。俺さ、知っての通りバカだからよ、できればおまえにも明日来てほしいんだ」
それは形峰からしたらあまり深い意味のあることばではなく単純に舞雄に一緒にいてほしいという言葉だった。舞雄は一瞬迷った。
「そんなオカルト話を本当に信じるのか。いつもならただの笑い話で済ますのに」と
「…まぁ、ボクもスタンドについて知っといて損はなさそうか…な？見えないから意味ないかもね。なにより、形峰が長い話の途中で寝

ないように見張らないとだしね」
だけど舞雄はやれやれっと行くと決心した。友の形峰のため、弓と矢の持ち主を見つけるため。そして、自分の中の一抹の不安のために。
「じゃ、マックいこーぜー！」
「うん！」

そして次の日の朝　三栗音高校、形峰たちのいる1年B組では朝から転入生のうわさでざわついていた。なにせハーフなのか外人なのか金髪の長身イケメンがやってくるだそうだ。
「それでは今日はいきなりだけど転入生を紹介しまーす。さ、入って入ってー」
担任の言葉の後にその転入生が入ってきた瞬間、女子たちの黄色い声が入り乱れるがそれをかき消すように、
「テ…！テメェは！アンドレー!!」
そう、その転校生は昨日のチャリオッツ使いの青年、アンドレーだった。ちなみに本文では青年と記入していたが実年齢は16歳だ。
「はい広村うるさい。えー、紹介するねー。今日からみんなと一緒に勉強する『田中安光（たなかやすみつ）』君ねー。みんな仲良くしろよー」
「みんな今後よろしく頼む。俺のことは気軽にアンドレーと呼んでくれ☆」
「えー…そしたらアンドレー君の席は…ま、友達の広村の横がいっか。色々面倒見てやれよー」
「ということだ。よろしくぅ形峰☆」
「こいつぁ…ヒヒ…ヘヴィだぜぇ…」（バタン）
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

第五話「勇敢なる愚者」

「ところで形峰。昨日のあの二人が話してた異変についてどう思う」
（焼きそばパンを食べるアンドレー）
　雑多な食堂で形峰、舞雄、アンドレーは昼飯を食べながら昨日のＳＰＷ財団の二人を思い返す。
「そりゃ…信じるしかないだろ。実際、俺自身がその被害者なんだからよ」（ラーメンをすする片峰）
「…」（牛乳を飲みながら二人を見る舞雄）
「確か、お前のスタンドは気が付いたら出てきたらしいな。なにか心当たりとかはあるのか？」（食後のプリンに手を出すアンドレー）
「ん～…（正直あるにはあるんだよなぁ…けど変な夢見たから～、て言ったところでなぁ～）」（ナルトが右頬についてる片峰）
「形峰、なんかあったそうだね」（ナルトをとる舞雄）
「うぇ?!なんでわかった?!」
「いや、もろ顔に出てたよ」（ナルトを見せながら）
「…まぁ、うん。心当たり的なものはあるが…スタンドが出た日になんか変な夢見ただけなんだよ…しかもはっきり覚えてねーんだよ」
「確かに、それだけだとわからないね」
「ところでアンドレー、お前はどーなんだよ。いつからスタンド出せんだよ」
「俺か？俺は生まれついてからだな。本格的にコントロールできるようになったのも物心つく前からだ」
「そういえば一茶さんが言ってたね。スタンドは生まれつき持ってる人のほうが多いって」
「まぁな。だが、チャリオッツが見える他人というのは生涯でお前たちが始めてだ。」
「そんなもんなのか～。てっきりもっといるかと思っててぜ」
「いやもっといたらもう少し知れ渡ってたんじゃないかな？」
「それもそうか」
　各々食事を終え、スタンドの疑問は残るが予冷がなる

「そんじゃ戻るか」
「だな」
　三人は片づけて教室へ戻る。
（それにしても変な夢か…）
　学校が終わり放課後。珍しく舞雄は一人で歩いていた。昨日の一茶とルピナの約束の時間は片峰のせいで遅れることになり時間をつぶすためにマックへ向かう。
（片峰の言ってた変な夢、一茶さんの言ってた弓と矢、それの被害者たち。二人とも関係なさそうにしてるけどスタンドていうのは常人の考えをはるかに超える力だとしたらもしかしたら関係あるんじゃないかな…）
　考え事をしながら歩いていたせいか他人の足のぶつかる
「あ、すいません！大丈夫です…か？（あ…やばい）」
　ぶつかった相手を舞雄は知っていた
（この人たち…確か三日前に片峰にやられてた黒いハゲだ…！）
「おうおう！なにぶつかっておいて人の顔じろじろ見てんだ！…て確かお前は広村のそばにいた女か…へぇ」
　片峰ほどではないがこの男も舞雄からすると圧倒体格差のある大柄な男である
「なぁちょおっとだけでいいからよぉ、俺と付き合えよ。抵抗しなきゃ何もしねえからよ」
「あ、あの…急いでるんで…ごめんなさい！」
「あ、まてこのチビガキ!!」
（どうする?!このまま来た道戻って学校？いや、それだと普通に追いつかれる…片峰がやるように路地裏に逃げる？…だめだ。そのあといつも相手ボコしてるからボクにはできない…お店に入るにしてもきっと警察とか来て面倒くさいことになりそう…そうだ！片峰に連絡…は相手が死ぬか片峰が金剛に殺されちゃうからだめだ！…どうしよう）
　ただがむしゃらに走りながら打開策を考えたが運動神経が普通の舞雄に対し相手は頭脳を筋力に割いたそこらの不良。普通に勝負し

たら確実に負ける
（逃げ切るためにせめて学校周辺まではいかないと…！そこなら先生がいるし最悪片峰もいるかもしれないしなにより相手もそうやすやすと入ってこれない…！）
　大通りと路地裏を行き来し、時にはごみ箱や自転車で邪魔をしながら舞雄は走った。だが、
「嘘?!工事中!!?」
　学校まであと少しだったが舞雄の目の前には工事中の看板が置いてありその向こうは絶賛改築工事のため立ち入りできない
「手間取らせやがって…いい加減にしろよ…」
　背後のは血管ぴくぴくの男がじりじり寄ってくる
（来るな…来るな…来るな…！）
　いつも片峰の背中に隠れ力のない自分のでは何もしてこなかった。無力。自分はあまりに無力だ。今も抵抗せずただ願ってるだけだ。そう思うと涙が出てくる。こんな現実見たくないと目を閉じる。
「来るな!!」
　男があと一歩というところで舞雄は願いを無意識のうち叫んだ。その声は工事の音でかき消され男以外には聞こえないほどの儚いものだ。だが、その願いを叶えるがごとくの不自然な風が巻き起こり男を襲う。
「ぐぉお！目に…砂がぁ!!」
　その風はビル風でもないし工事で起こったものではない。
「な…なんだ…？背後から風？本当に…いやそんなまさか…でもこれはチャンスだ」
　不自然な風に自分の中の疑問が浮かび上がるが、舞雄はそれを見てすかさず逃げ出した
「よし、これでなんとか逃げれる！」
　そして大通りに出ようとしたらまたしても人と接触しそうになりそれを避けようとして転んだ
「おいおい大丈夫…て舞雄？」
「あ、え…片…峰？」

接触しそうになったのは金剛の説教でヘロヘロになっている片峰、それと転入で色々手続きしたり質問攻めをされたアンドレーも一緒だ

「おい舞雄…?!なんで泣いてんだ?!大丈夫か?どこか痛いのか?!」

アンドレーはともかく片峰を見て安堵してさっきまでの恐怖がゆるんだからか舞雄はボロボロと泣き出す。そして、片峰は周りを見渡し舞雄の後ろにいる男を見つけるとさっきまでヘロヘロだったのが嘘のように全身に血が駆け巡る。

「ほう…なんとなくわかったぜ舞雄。あとは俺がケリをつける…!!!」

その後その男は工事現場の近くで顔面埋め込まれてる姿を発見されるのであった

「それにしても災難だったな。ケガはないか?」

「なんかごめんな。俺のせいで巻き込んじまって」

「大丈夫だよ。結局片峰が助けてくれたんだし」

「いや…その火種も俺なんだけどねぇ…」

「それにアンドレーもありがとう。気遣ってくれて」

「い…いや…!俺は…その、力を持つものとして当然の礼儀であり…」

と照れ隠しでなにかをぶつぶつ唱えてる。

「今度からちゃんと一緒に帰ろうな」

「うーん。それはそれでうれしいんだけどそのためには金剛に呼び出しされないようにね?」

「う…善処する」

「片峰じゃなくてオレでもいいんだぜ」

「あはは。それでもいいかもね」

「舞雄ぉ?!」

三人は談笑しながら工事中のため少し回り道をしながら昨日のＳＰＷ財団のビルに向かう。

だが、その談笑も頭上の轟音と「逃げろぉ!!」という叫びでかきけされる。

片峰達が通りすぎた改築中のビルから鉄骨が落ちてくる。

三人は既に通りすぎていて被害はないが鉄骨の落下地にはあろう

ことが転んで逃げ遅れた制服を身にまとった女の子がいた。
「ザ・ハンド!!!!」「チャリオッツ!!」
二人はスタンドを出して助け出そうとするが…
(違う!この場合二人のスタンドは救出に向いていない!ザ・ハンドの削り取るのはまだ精密性が足りない、チャリオッツの速さでも助け出すとなったら話は変わる…なら…どうする…!どうする!!…そんなの『簡単』だ!)
「あの子を助けろ!!『愚者(ザ・フール)』!!!」
舞雄の体から出てきたのは後ろ脚が車輪で機械のような外装の黒金の犬だった。それは先に出てたスタンドすら追い抜かし同時に子供のほうに向かっていく。飛び出して僅かな時間で背中からは砂でできた羽を展開し地面すれすれの低空飛行をし鉄骨を難なく避けていき女の子の手をつかむと反対側まで引っ張って行き無事に救出できた。
「「…え?」」
片峰とアンドレーは意外で一瞬の出来事で開いた口が塞がらない。
「……あ、ほ、ほら二人とも早く行こっか。話は後でするからさ!」
舞雄は固まってる二人を引っ張っていき早々に現場から退散した。
ＴｏＢｅｃｏｎｔｉｎｕｅ→

第六話「Ｋｎｏｃｋ　Ｔｈｅ　Ｌｏｃｋ」

やれやれ、人間というのはいつの時代も不平等だよな
才能のあるやつ
人望のあるやつ
金のあるやつ
努力できるやつ
身長が高いやつ
顔がいいやつ
そして、持ってるやつがいればなにも持っていないやつもいる
才能がない
人望を得るためのコミュニケーション能力もない
金もなければ
努力する気力もない
そんなやつを世間一般的にダメ人間という。それとも人間というのも憚れるからゴミとしか言わないか。
どこぞの人気のパンのヒーローの歌でもゴミは生きてるとは言われないからな。
じゃそんなゴミが這い上がるにはなにをすればいい？
努力しろなんて言葉は既に聞きあきた。
そんなの簡単だ。
神に祈る。
それか常人が持ってない力があればいい。
「そして、俺は今日神に祈りが届き力を得た！
誰もかもを屈服させることのできるすごい力を！
そう！俺は、『下倉根義（しもくらねよし）』は今日産まれたのだ!!さて、学校に着いたら誰からこの力を使ってやろうか。今から考えるだけで笑いが止まらないぜぇ…」
この下倉という小柄な男、学校へ向かっているが途中で犬の糞とガムと酔っぱらいのゲロを踏んだことに気づしていないようだ。
「うぃー…す…」（片手にバナナの片峰）

「おう…」（寝ぼけ眼に花提灯のアンドレー）
「おはよー」（髪が少し乱れてる舞雄）
　三人は昨日の工事現場を去った後ＳＰＷ財団ビルで舞雄のスタンドについてとスタンドの特性を一茶とルピナに講義してもらっていた。
『まぁ、正直舞雄くんがスタンドを発現するのは私は読めていた』
（コーヒーを飲む一茶）
『『えぇ!!!』』
『てかなんで舞雄まで驚くんだよ?』
『いやー…なんか片峰の夢の話聞いてなんかボクも似たようなの見たようなって思って。それで今日のあの現場でこう…女の子を助けないと!!と思ったらヴィジョンが浮かんできてそしたら出せたんだよね』
『しかし一茶さん、なんで舞雄がスタンドを発現させるってわかったんだ?』
『そうだな、アンドレー。君は片峰を探すときなにか気がつかなかったか?』
『あのとき…そうだな…言葉にするのは難しいが…直観というか『運命の赤い糸に引かれる』そんな感じがしたな。その後、そこらへんで転がってた不良どもに声を掛けたら謎の力に吸い寄せられてぶん殴られたと聞いて確信したという感じだ』
『そう。スタンドはスタンドと、スタンド使いとスタンド使いは赤い糸の様に引かれ合うのだ。理屈としては解明できていないがこれは確かなんだ。現に、私も君たちを見つけたのはそんな感じだったからな』
『スタンドとスタンドは引かれ合う…』
『そして、このことから、今後君たちに近づいてくる輩には恐らく片峰君と舞雄君がスタンドを発現させた元凶、弓と矢を持つ夢に関係するスタンド使いの刺客か、それとも君たちと同じ被害者が引かれ合うだろう。できる限り警戒してくれたまえ』
「…なんてことがあったけど正直二人はどう思う?ボクは少し恐いな

…」
「あぁ、俺はぶっちゃけいつもと変わらないな―」
「そうだな、俺は元々自分と同じスタンド使いと戦うためにここに来たからむしろ好機だな」
「ダメだこの喧嘩バカどもは。まぁでも頼りにはしてるからね」
（あれは…この学校一の不良広村、それに昨日転校してきたアンドレーとかいう外人に広村と常にいるかなり可愛い橋野さんか…そうだな…この学校でやばいやつ第一位のあいつを屈服させられればオレの今後の学生生活はきっと楽しいだろうなぁ～）

第７話「Ｋｎｏｃｋ　ＴＨＥ　Ｌｏｃｋ　その二」

「よぉ下倉。相変わらず芋虫のようにこそこそしてて気持ち悪いな」
「ちょっとそのきたねぇ面貸せよ」
　もの影でこそこそしていた下倉に声をかけたのは彼の中学からの同級生の二人。もちろん、仲の良い友達…というわけではない。
「俺たちはさぁあ、とてもツイてると思わないかね下倉君よぉお。中学から同じ学校で高校も同じ。」（スポーツできるやんちゃ系。山田）
「これぞザ・運命というやつじゃねーかぁ。なあお前もそうだろ？」
（やんちゃ系にぶらさがってる出っ歯。山本）

　校門から離れた人気のないフェンス
　逃げられないように壁ドン
　他人になにをされてるか見られないように二人で囲む
　これぞ王道なカツアゲｓｔｙｌｅ
（さ…最悪だ…まさかこんなときに限ってこいつらかよ…！マジで最悪だ…犬の糞を踏むより最悪だ…
　いや…こんな時だからこそか?!この窮地を脱しないと到底あのやばいやつ第一位の広村形峰をなんとかすることはできないんじゃあないか?!…なら…こいつらで能力を試してやるか…！）
「あ…あぁ…確かに…運命…かもな」
　声は怯え震えていていた。視線を下げ手は落ち着きがない。
「だよなぁ…俺達は困ったときに助け合う運命共同体みたいに学校生活を送ってきたじゃあないか」
「そうだそうだ。俺たちゃ今日の昼めし食わないとしんじまうぞー」
（言葉をしっかり考えろ…逆上させない…かつ、相手の隙を作れ…！）
「あ…あぁ…俺達は、運命共同体だ。ほらあのときだって俺を助けてくれただろ」
「ほら中学の時にあったじゃん。忘れたのよ山田」
　その言葉は鍵だ。こいつらの心の隙間に漬け込むための…！
「あ…あぁあ思い出した思い出した。あったなそんなこと…」

（中学のころだとぉ～？そんなこと正直覚えてなんかいないし何なら助けた記憶なんてそこら辺の猫助けたことぐらいしか覚えてねーわ。けっどー決してここで誤魔化すことは悪いことではないしとりあえず乗っとけばいい感じに話が進みそう～）

…だからその口車に乗せられた

「山田…お前は今、嘘を言ったな。『発動だ』」

発動の単語で山田の体中心に錠前が出現する

「あ…あれ…お、重い…！体がというか…肉体的じゃないなんかが…！」

錠前は囚われた本人には見えず

思考は止まり

考えることができなくなり

ただただ

罪悪感が産まれ、埋もれる

「そう、俺の力は人の奥底にある『罪悪感』が鍵となる。俺に対して少しでも罪悪感を感じる輩にはこうやって重くさせるんだよ。それに比例してな」

「や…山田?!おいくそ芋虫なにをした！」

「なんだ、お前は山田がいないと今までなにもできないのか」

「そんなわけ！そんな…わきぇ…！お…オモシ…!!」

今まで寄生していた宿主を失い、たかってきた相手は実はやばいやつと知り得たいの知れない恐怖、そして今までの行いに対する罪悪感で一瞬で地面にめり込む

「なぁ、俺が言いたいことはわかるよなぁー。俺が今までに払った金をいっしゅ…いや一ヶ月までに耳を揃えてきっちり返してもらうからなぁー！俺は中学の時から全部メモしてたんだいつどこでいくら払ったかをよぉ

もし返さなかったら先公どもに言いふらすし警察や裁判所にも言うからな」

学校の先生、警察、裁判所。この単語でさらに二人の罪悪感はましついには涙すら流しだす。

（クッソ…ここで一週間でとか二倍にして返せて言えない辺り俺は小心者なんだよなこんちくしょ）
「だが・・・!!、まずは小者どもは始末した。しかも能力の実験もできた…！ならぁ～、次は奴らだ。奴らさえ俺の能力で手中にしてしまえばぁ～、俺の今後の高校生ライフは確実なる安心と共に送れるぞぉ！やったー！」
宝くじが当たったようにスキップしたい気分だ、だが考えろ。宝くじだって当たっただけじゃなくてそのあと銀行に行ったりするだろ。
「だが…それは今じゃあないな。敵対心を持たれたら恐らく罪悪感なんてなくなってしまうからな…だからこそまずは観察だ…観察して、弱味を見つける…！」

ところでこの能力の名前をどうするか～…ここはかっこいい名前にするのもいいがいっそシンプルにしたほうがむしろ強者感があっていいかもなぁ～グフフフフ

第８話「Ｋｎｏｃｋ　ＴＨＥ　Ｌｏｃｋ　その三」

○月○日　広村片峰を我が能力、「《皇帝の絶対不可逆神域の城壁》《エンペラーズアンリミテッドゴットギフトウォール》」で手中に収めるために観察をすることにした。

ただし、観察するにしてもやつはあんななりでも一年、俺は二年のため窓際族の特権を使用しての観察、及び昼休み中、下校時刻で自然に遠目から観察することにする。

…この能力名はいくらなんでもナンセンスすぎるため改名も同時に行う

○月△日　観察開始から3日目。幸先よく食堂にて捕捉。広村片峰の近くにいる二人、橋野舞雄、およびアンドレー。二人ともやつと同じクラスで登校時以外にも昼食を一緒に取る仲のようだ。

そしたらまずはあの二人のうちどちらかを我が能力…そういえば名前どうしようかなぁ…初めて使った時門とか宝箱に使うような錠前がでてきたしそのまま「錠前」？いや、せっかくならルビを振ってかっこよくしよう！

○月□日　観察から4日目。やつのクラスの体育を見た。やつもアンドレーも両者見た目通りの身体能力を有している。ただ一瞬だけ気のせいかもしれないが…やつが瞬間移動したかのように一瞬で移動したように見えた。もちろん俺自身授業中だから気のせいだとは思うが念のためメモを…それにしても体操服姿の橋野さんめっちゃかわいくない？

○月#日　観察から6日目。下校中の三人を観察することができた。やつは名が知れ渡っているからか世紀末な奴が誘蛾灯のように惹きつけられるがそれまたすべて無慈悲に返り討ちにしている。驚いたことにアンドレーも売られたものは買う主義らしく二人で無双していた。だがアンドレーは礼儀正しいというか騎士道がなってい

るというかめっちゃ紳士だった。誤ってぶつかってしまった人に対し手を差し伸べたり謝罪してくれたり汚れ払ってくれたりと物凄く丁寧だった。というか俺だった。正直死んだかと思った。

○月☆日　観察から8日目　以前より近いところに食堂の席を確保できた。少しだけ会話が聞こえたが「すたんど」？というものについて少しだけ話していた。それについての内容は話していなかった。念のため天下のぐ～ぐれぱいせんに聞いてみても、「もしかしたスタントマン？」だったり何かを立てるスタンドのほうしか出てこなかった。おそらく俺の知らないマイナーなゲームや漫画の内容か。それともマジでスタントマン狙ってるのか？もしそうならアンドレーは意外に役者とか向いてそうだし橋野さんも可愛いからもし作品出たら見たいかも

○月♪日　観察から11日目　下校時やつの口から「明日補講とかまじめんどくせぇ」という嘆きが聞こえた。つまり明日のおそらく放課後はやつはあの二人と一緒に下校しないと予想できる。なら、我が力「錠前（ザ・ロック）」で狙うなら明日か?!…早計かもしれないが少なくともここ数日間観察してきたがある程度3人の人物像はわかった。リスクは完全にぬぐえないがそれでは何時まで経っても行動できない気がするしこちらが見ていることも感づかれる可能性も十分にある。確実なチャンスは…明日だ…!!そして次に大切なのは錠前を使う相手の順番だ。初めて使った時のように山田に使った後連鎖的に山本も簡単に引っかかってくれた。つまりは強い奴から…!というわけじゃないな。今回のことを考察するに橋野さんとアンドレーの場合は逆だ。特にアンドレーは力は強いし悪い奴に対してはやつ並みに問答無用。だが逆に言えば人畜無害な俺に対してはぶつかってしまった時のように紳士なはず。なら本当にめちゃくちゃ申し訳ないが橋野さんからだ。作戦としては橋野さんと何かしらの形で接触。もちろんアンドレーがいない隙にだ。その後何とか錠前を使う。もちろんそれで橋野さんがなにかあったらアンドレーはおそらく第一発見者の俺を疑うはず。そこで俺はあくまでも介抱してるだけといえば「俺は人畜無害な先輩を疑ってしまった」となり錠前が使えるはずだ…!

なんだこの完璧なる作戦を考えたのは天才か?!あ、俺かぁ!!

・・・その橋野さんとの接触とどう会話を作っていくかが一番問題だなぁ

年下の女子と会話したことなんてないよ…

そもそも異性との会話なんてオカンとしかしないよぉ…

下倉根義の観察日記より抜粋